

Baby Talk の日米比較

——日米母親の発話行動の事例研究——

小林 祐子

I はじめに

子どもがことばを覚える過程で母親はどのような役割をはたすのだろうか。ことば使いの「しつけ」、すなわち speech socialization に対する養育者の役割についてはこれまでも広く論じられてきている。しかしことばの土壌が形成されるいわば「ことばの胎生期」における母親の働きを「社会化」の営みとして論じることは少なかつたように思われる。これはことばの発達観とも係わってくる問題でもあろうが、ことばの獲得は子どもの社会化への道を大きく切開くと同時に、生まれおちた社会のもっとも複雑な記号体系を身につけるという意味で、それ自体社会化過程の第一歩といえることができよう。とすればその過程に母親がどう関与するかを知ることは、子どもの社会化の担い手としての母親のあり方を包括的にとらえる上で欠かせない視点といえる。

言語獲得に母親がどうかかわるかの問題が、生成文法理論の創唱者である N. Chomsky の言語能力生得性の仮説の出現をきっかけに、あらたな関心をもって近年見直されているのは周知の通りである。人間の言語能力の特徴は、有限の言語事実から無限の変化にとんだ文を生成し、これを理解する創造性にある。これが最も集約的に現われるのが、子どもの言語習得過程で、子どもに「言語習得装置」(language acquisition device) が先決的に組込まれていると仮定しない限り、かくも短期間(生後3, 4年間)に言語を獲得するという事実は説明づけられないと生得論者(Chomsky, 1965; Fodor, 1966; McNeill, 1966)は主張する。これらの人びとはその論拠の一つとして、母親が子どもに提供する「第一次言語資料」(primary linguistic data)のお粗末さを指摘する。いい淀み、いい誤り、断片文、いりくんだ構文など、子どもに対する「入力言語」は不良で貧弱、それにもかかわらず言語獲得を果たすということは言語の生得性を裏付けるものだといっているのである。この見方に立てば母親の役割はきわめて限られたもので、「言語習得装置」の作動に必要な刺激を与える「第一次言語資料」の提供者ということになる。

子どもの言語獲得に母親は一体生得論者たちがいうように教育的配慮を示さないものなのか。言語能力が生得的であるにせよ、これをひき出し、伸ばすのに適した言語環境を整えようとししないのか。こうした疑問が「第一次言語資料」の収集・分析へと研究者を向かわせたのは当然の成りゆきといえる。その結果、英米を中心に言語獲得期の子どもに対する母親の発話資料が大量に集まり、生成文法の立場から純理論的に仮定された「第一次言語資料」の不良説は後退を迫られることとなった。すなわち、集められた資料が一致して明らかにしたことは、母親の子ども向けのことばは大人向けのことばとは異なる特性をもつこと、その特性は相互作用の相手として未熟な子どもへの調整努力を示すもので、子どもの言語獲得に有効に作用することなど、子どもに対する「入力言語」の適切性を裏づけるものだったからである (Vorster, 1975)。

心理言語学の分野において「入力言語」の特性を明らかにする研究が進められるなかにあつて、Chomsky の「言語能力」の概念自体が挑戦を受け (Hymes, 1972)、文法ルールに加え、社会的相互作用のルールも含む「伝達能力」の獲得をもって「言語獲得」といえるという考え方が次第に支配的となつていった。1970年代は従つて「母子の相互作用」に研究的関心が広げられ、社会言語学者も研究に参入し、母子のコミュニケーションのダイナミックな相も次第に明らかになりつつある。

幼児むけのことば、すなわち“baby talk”⁽¹⁾ (以下 B T と省略) に対する社会言語学的関心は、もともと位相語としての特性研究から出発しており (Ferguson, 1964; 1971; 1977)、言語獲得過程を解明する手がかりとして「入力言語」研究に向つた心理言語学とは出発点において関心をことにする。しかし、これら二つの研究的流れは、B T の特性の究明という共通の課題で結合し、母親の発話研究の進展に拍車をかけている。今までのところ英米の B T 研究者間で一致度の高い B T 特性は、次の通りである。

- (a) 発話が構造的に単純で、短かく、文法的逸脱が少ない (e. g. Brown & Bellugi, 1964; Broen, 1972; Snow, 1972; Phillips, 1973)
- (b) 調音が明瞭で、テンポが緩慢 (e. g. Drach, 1969; Broen, 1972; Phillips, 1973)
- (c) 声の高低・強弱などプロソディック要素が誇張的 (e. g. Garnica, 1977)
- (d) 語句や文全体の反復が多く余剰性が高い (e. g. Kobashigawa, 1969; Snow, 1972; Moerk, 1972)
- (e) 話題は現前の具体的な事象を中心とする (e. g. Phillips, 1973)
- (f) 複雑な音の配列は一部省略、または別音に置換えられる (e. g. Ferguson, 1964; Snow, 1972)
- (g) 語彙の統制、幼児用特定単語の使用が見られる (e. g. Ferguson, 1964; Phillips, 1973; Widdowson, 1976)

以上(a)～(g)の特性は、英語圏のB Tばかりでなく、世界的に共通する普遍性の高いものとされる。英語、日本語をはじめ多くの言語のB Tの比較研究を行った社会言語学者 Ferguson (1964; 1977) もこれらの特性を認め、その基底に *simplifying*, *clarifying*, *expressive* の3つの調整要素の働きをみる。

Ferguson のこの3つの調整要素のうち、1960年代から70年代にかけてのB T研究で主に関心と呼んだのは *simplifying* と *clarifying* で、*expressive* はほとんど問題にされなかった。ここで言う“*expressive*”とは愛情の対象としての子どもに対する特別な言語操作のことで、独特の甘えのある抑揚や、いわゆる「赤ちゃんことば」の使用が含まれる。子どもの言語獲得、特に文法ルールの習得に言語環境が適切かどうかを主要関心事としてB T研究が発達したことを思えば、その軽視も当然といえる。しかし幼児言語学者 Brown (1977) の指摘をまつまでもなく、B Tは母親が子どもを単に言語的な未熟者としてではなく、いとしい未熟者としてとらえているところに生じている。その意味で、B Tの *expressive* 要素も母親が子どもに用意する言語環境の一部として実証的に研究される必要があろう。

本稿は以上のような問題意識に立って、言語獲得期の子どもに対する母親の発話行動を *expressive* 要素を中心に考察しようとするものである。これは総合研究「子どもの社会化過程に関する比較文化的研究」の言語学的考察の一部として構想されたもので、日本の母親の比較の対象としてアメリカの母親を選んでいる。ただし時間と労力の制約から、基礎資料の収集は日米各々僅か一組の母子に限定されていることを断わっておかねばならない。

子どもの社会化という文脈で、B Tの *expressive* 要素を比較文化的観点からとりあげる背後には次のような仮定がある。

B Tの特性に高い普遍性が認められるなかで、その使用、特に *expressive* 要素に対して社会は敏感に反応し、異った態度を示すといわれる。日本とアメリカとでは、日本の方が受容的で、母親の規制意識も比較的少ないのに対し、アメリカでは拒否的で、乳幼児に対する幼児語の使用は子どもの正常な言語発達を妨げるという考え方が社会に滲透しているといわれる (Ferguson, 1964; Fischer 1970)。こうした文化的な態度の違いは当然その使用度を左右し、言語獲得期における母子の相互作用のあり方に影響を与えるものと想定される。この仮定は資料的に裏付けられるものだろうか。この問いをもって本研究は出発している。

II 方 法

1. 発話資料

分析対象とした資料は、日米各一組の母子の自由な相互作用の場面を一回平均45分、全部で7回、総計約315分、テープレコーダーを使って録音したものである。筆者が収録に立ち合ったのは第一回と最終回のみで、そのあとはテープレコーダーを家庭に預け、任意にふだ

んのままの状態の母子のやりとりを録音するよう依頼した。収録は日本人の母子に関しては1981年の4月中旬から5月中旬の1ヶ月間、アメリカ人の母子は同年8月の1ヶ月間に行われた。

録音資料をテープからおこす作業に関して、正確なききとりが困難なアメリカ人母子の発話は、筆者が整えた転記原稿をネイティブスピーカーにテープと照合してもらった。しかし、母親の声の小ささ、環境のノイズなどにより不明瞭な発話として全体の9%強を削除することとなった。

資料を得た日米の母子、ならびにその家庭の特性は表-1, 2に示す通りである。

表-1 対象母親とその家族

	年齢	学歴	職業	夫の職業	家族構成	居住地
日	33歳	4年制大学卒	無職	銀行勤務	夫・1子・母方の父母	東京
米	32歳	4年制大学卒	無職	在日米大使館勤務	夫・2子	東京

表-2 対象児年齢・性別・きょうだい

	年齢	性別	きょうだい
日	17ヶ月	男	1人っ子
米	12ヶ月	女	姉1名(2年11ヶ月)

2. 分析方法

2. 1. 分析単位

「発話」を分析の単位とする。「発話」とは相互作用の参加者が話しの番(turn)の間に発した任意の長さの談話で、ポーズによって前後が区切られ、文法的に、また機能的に独立性をもったものを言う。この原則を用いて録音転記資料を一単位ごとに区切るに当たって、次の作業基準を設けた。

- (1) 応答詞、感嘆詞、かけ声、などはそのあとすぐ談話が付随する場合も、その機能的独立性から、一発話とする。
- (2) 子どもの動作に反応したり、遊戯的要素として発せられるリズム表現、擬音・擬態表現は、その機能的独立性から、一発話とする。
- (3) 反復される語句に関しては、繰返しの中にポーズがある場合、それぞれ別個の一発話とみなす。

こうして得た発話総計は、日本の母親(以下Ⓜ一母と省略)が3,012、アメリカ人の母親(以下Ⓜ一母と省略)が1,008である。時間的に同じ条件のなかで、Ⓜ一母の発話数がⓂ一母の約1/3になっているという事実に関し、両者間に場面的条件の違いがあることを指摘しておかなければならない。Ⓜ一母の場合、対象児は1人っ子で、その子との相互作用に専心で

きる。これに対し㊦一母の場合は、対象児の他に2歳11ヶ月の姉娘がおり、常時相互作用の場面において母親に働きかけ、本の朗読を求めるなど母親の注意を対象児からそらす役割を果たしている。その上㊧一母子の遊び場面には一切登場しなかったテレビが、㊦一母子の遊び場面では、機器操作が自由にできる姉娘によって導入され、母子の face-to-face のかわりあいを削減している。ちなみにこのような状況で㊦一母が45分間中に対象児に発した最低発話総数は僅か95となっている。しかし、姉娘やテレビの干渉の少ない遊び場面でも最高発話総数は251で、1回の平均発話数が約430を数える㊧一母とくらべ、言語的働きかけが相対的に少ないことを示している。

2. 2. Expressive 要素の分析指標設定

B Tに見られる特性が伝達調整機能 (simplifying, clarifying) と、心理的愛撫機能 (expressiveness) をもつという仮定に立ち、後者の言語的要素を中心に、日米の母親の発話資料の分析をこころみることとする。

一般に日常の発話行動で話し手の心情は、文を組立てる語の選択、文の上にかぶせるプロソディック要素、会話運びの言語操作に主に表われると言われる。ここでは、文字化資料から比較的容易にとらえることのできる語彙の選択行動と会話操作行動に焦点をしぼることとする。前者における expressive の指標には、一定の形式をもった幼児語彙 (e.g. マーマ; mummy) を、後者の指標には「接触機能表現」を、それぞれ用いることとする。

ここで扱う幼児語は、形態論的特徴を示すものに限定し、成人語に音形的調整 (e.g. [s] → [tʃ]) を加えたものは除外する。分析は、使用幼児語の意味分布、語形特徴、使用度について行なう。分析に当たっては、日米の母親の発話資料のなかから「接触機能」的発話を取り去り、叙述性の高い発話の中に出現する異なる幼児語、すなわち「タイプ語」をまずぬき出し、これを意味領域別、形式別に分類して、使用幼児語の特徴を日米各々にわたって調べることとする。つづく使用度の調査では、対象を名詞に限定し、当該範囲の発話に使用された名詞ののべ総数、すなわち「トークン」に占める幼児語名詞「トークン」の割合を見ることとする。

幼児語の使用が、子どもとの親密な「共感度」を求める母親の語彙的な選択行動であるとすれば、「接触機能表現」の使用は、「共感度」の高いコミュニケーションの場を確保しようとする母親の会話操作上の選択行動といえる。

「接触機能」とは Jakobson (1960) が定義づけた言語機能の一つで、「相互作用に入り、そこにとどまるための物理的・心理的結びつきをつくり出す」ことばの働きをいう。成人同士の会話では、あいさつ、呼びかけ、あいづち、確認、問いかけなどがこの役を果たし、おじぎ、握手、ほほ笑み、うなづきなどの非言語要素と、その働きにおいて共通する部分が大

きいといわれる。

「社会化」過程の子どもとの交わりでは、対話の場に子どもをとどめるだけでも特別の言語操作を必要とする。満足のいく相互作用のためには、より一層の積極的な言語的操作が母親の側に求められる。このような言語的操作を一つの範疇にまとめ、適切な用語がないまま、便宜的に「接触機能表現」と呼ぶことにする。この名で呼ばれる範疇に次の諸言語要素を含めることとする。その多くは Snow (1977a) が contentless utterances と呼んでいるものと共通する。

(a) 呼びかけ

e. g. シンチャン；ネエー
Becky; hey

(b) 応答・あいづち

e. g. ウン；ソウ；ソウネ
yeah; uh-huh

(c) 念おし

e. g. ネー

(d) きき返し

e. g. ウン♪
huh?

(e) かけ声

e. g. ヨイショ
there, come on

(f) 感情表現

e. g. アラー；アーア
ah; oh

(g) 遊戯的音声活動

e. g. オイチニ オイチニ
tap tap tap

分析にあたっては、「接触機能」的発話数が総発話数にしめる割合を見ると共に、これらの発話を機能別に分類し、そこから子どもに対する母親のコミュニケーション・ストラテジーの特徴の抽出をこころみる。

III. 考 察

1. 幼児語

1. 1. 意味分類

㊦一母の使用した幼児語の「タイプ語」総数は185語、これに対し㊦一母のそれは㊦一母

の約1/3で、わずか22を数えるのにとどまっている。

これら使用語を名詞と非名詞に二分し、名詞のみを意味分類の対象とした。㊦一母使用の名詞を非名詞からふりわけると、幼児語名詞(句) (e. g. イイコイイコ), または擬声語、擬態語 (e. g. パカパカ) が動詞「スル」に前置され一語に近い動詞性を発揮している場合、これを動詞複合語扱いとした。この結果、㊦一母には皆無の動詞が、㊦一母では使用幼児語の約20%を占めるに至っている。

名詞は表一3に示す通り、幼児の生活環境にあわせて5つの意味領域に大別し、さらに17の類に下位分類して、数とパーセントをだした(実際に使用された幼児語例については表一4を参照のこと)。

㊦一母の場合、身体関係語、日常生活関係語、遊び関係語、自然界関係語の順序で使用語

表一3 ㊦㊦使用幼児語の意味分類

品詞	意味領域	㊦一母		㊦一母	
		type-word 数	%	type-word 数	%
名詞群	I. 1. 自然界に関することば	17	9.1%	6	27.2%
	1. 1. 動物	(15)	(8.1%)	(6)	(27.2%)
	1. 2. 植物	(1)	(0.5%)	(0)	(0%)
	1. 3. 自然現象	(1)	(0.5%)	(0)	(0%)
	2. 身体に関することば	53	28.6%	4	18.1%
	2. 1. 身体各部位・生理現象	(24)	(13.0%)	(3)	(13.6%)
	2. 2. 飲食物	(10)	(5.4%)	(0)	(0%)
	2. 3. 衣類	(6)	(3.2%)	(1)	(4.5%)
	2. 4. 動作・行為	(9)	(4.9%)	(0)	(0%)
	2. 5. 身体福祉	(4)	(2.1%)	(0)	(0%)
	3. 人と日常活動に関することば	43	23.1%	5	22.7%
	3. 1. 人名・人間関係名	(9)	(4.9%)	(4)	(18.2%)
	3. 2. 人の特性	(6)	(3.2%)	(0)	(0%)
	3. 3. 生活活動	(7)	(3.8%)	(0)	(0%)
	3. 4. 対人行動	(6)	(3.2%)	(0)	(0%)
	3. 5. すまい・生活用具	(12)	(6.4%)	(1)	(4.5%)
	3. 6. その他	(3)	(1.6%)	(0)	(0%)
4. 遊びに関することば	24	13.0%	2	9.0%	
4. 1. 遊び道具	(17)	(9.2%)	(1)	(4.5%)	
4. 2. のりもの	(5)	(2.7%)	(1)	(4.5%)	
4. 3. その他	(2)	(1.1%)	(0)	(0%)	
5. その他	1	0.5%	0	0%	
非詞名群	II. 1. 形容詞	9	4.9%	5	22.7%
	2. 動詞	38	20.5%	0	0%
	総計	185	99.7%	22	99.7%

種が多いのに対し、⊗一母の場合は、Ⓔ一母で最低だった自然界関係語が最高の位をしめ、
ついで日常生活関係語、身体関係語、遊び関係語の順になっている。

表-4 ⊗⊗使用幼児語一覧表

意味領域	Ⓔ	⊗
I. 1. 自然界 1. 1. 動物	①カバサン②ライオンサン③クマチャン④ネズミサン⑤リスサン⑥ネコサン⑦ウサチャン⑧オウマサン⑨ワンワン⑩ワンワンチャン⑪ニャーニャー⑫トリサン⑬ハトサン⑭ヒヨコチャン⑮ピヨピヨチャン	①mousey ②bunny ③doggy ④horsey ⑤kitty ⑥piggy
1. 2. 植物	①オハナサン	
1. 3. 自然現象	①アメコンコン	
I. 2. 身体関係 2. 1. 身体各部位 ・生理現象	①オミミ②オミミサン③オメメ④オメメチャン⑤オテテ⑥オユビ⑦オユビサン⑧オハナ⑨オハナチャン⑩オクチ⑪オツム⑫オクビ⑬オカオ⑭ホッペ⑮アンヨ⑯カンカン(髪)⑰オヒザ⑱アゴサン⑲オセナ⑳オコエ㉑オヨダ(涎)㉒オセキ㉓ウンチ㉔ウンウツ(大便)	①tummy ②wee-wee ③pee-pee
2. 2. 飲食物	①タマゴサン②ニューニュ(牛乳)③ヨーグルトサン④オリンゴサン⑤オミカンサン⑥イチゴサン⑦ポッキーチャン(菓子名)⑧オミズ⑨マンマ⑩オクスリ	
2. 3. 衣類	①オヨーフク②オボーチ③オリボン④タータ(靴下)⑤オクチュ⑥クック(靴)	①lovey (常用のブランケット)
2. 4. 動作・行為	①アンガ②タッチ③オンリ④オスワリ⑤オコシカケ⑥ノンノ(のぼること)⑦オシャブリ⑧ネンネ⑨ネンネネンネ	
2. 5. 身体福祉	①オカゼサン②オネムチャン③ズルズルサン(鼻風邪状態)④イタイイタイ(怪我)	
I. 3. 人と日常生活 3. 1. 人名・人間 関係名	①シンチャン②ボク③パパ④ママ⑤オジーチャン⑥オパーチャン⑦オニーチャン(年上の男の子)⑧オネーチャン(年上の女の子)⑨オジチャン(壮年の男性)	①daddy ②mummy ③Becky ④Becca- Becky
3. 2. 人の特性	①チビチャン ②オリコーサン ③オスマシサン ④ウソッコ(嘘つき)⑤マネッコ(真似をする子ども)⑥クツキンポー(母のあとを追って離れない子ども)	
3. 3. 生活活動	①オデカケ②オンゴト③オカイモノ④オカタツケ⑤オサンボ⑥オイタ⑦オテツダイ	
3. 4. 対人行動 あいさつ	①オイデオイデ②バイバイ③アンガトサン④ゴッソーサン(食事の礼)⑤オヘンジ⑥ダッコチャン(抱擁)	
3. 5. すまい・ 生活用具	①オウチ②エントツサン③テレビサン④カゴサン⑤カガミサン⑥ローソクサン⑦オトケイ⑧オデンワ⑨オデンワサン⑩リーンリーン(電話)⑪オイス⑫オセキ(席)	①ding ding
3. 6. その他	①オンモ②オソト③オシャシン	

I. 4. 遊び 4.1. 遊び道具	①スヌーピーチャン(人形)②オニンギョサン③コイノボリサン④フーセンサン⑤モッキンサン(木琴)⑥ツミキサン⑦キイロサン⑧ミドリサン(黄(緑)色の積木)⑨マンマルサン⑩サンカクサン⑪シカクサン(各型の積木)⑫ラッパサン⑬プープーサン(ラッパ)⑭タマタマ(ボール)⑮ボールサン⑯テッポーサン⑰バーン(鉄砲)	①booky
4.2. 乗りもの	①キシヤサン②キシヤポッポ③ポッポ④オクルマ⑤ブーブ⑥(車)	①choo-choo
4.3. その他	①オマツリサン(祭り)②チョンチョコリン(相手の頭上にてのせて揶揄対象とするもの)	
I. 5. その他	①ダイジダイジ(大事)	
II. 非名詞群 1. 形容詞系	①オモイオモイ②スゴイスゴイ③チャムイチャムイ(寒い)④タカイタカイ⑤イタクナイイタクナイ⑥ダイジョブダイジョブ⑦バッチバッチ⑧ピッチョリ⑨ベチョンベチョン(きたない)	①icky ②yuk yukky ③teenie ④yummy yummy ⑤all gone
2. 動詞系	①クツイタクツイタ②デテキタデテキタ③ワレタワレタ④アッタアッタ⑤ニアウニアウ⑥イイコイイコシタゲル(愛撫)⑦カワイカワイシタゲヨウ(愛撫)⑧ナイナイシテオコウ(片付け)⑨キレキレシマシヨ(きれいにする)⑩ゴロンシテゴラン(仰向けに横になる)⑪アーンシテ(口を開ける)⑫カミカミシナクチャ(鼻をかむ)⑬フーンシテゴラン(鼻をかむ)⑭ウーンシタノ(排便)⑮クチュクチュシタデシヨ((歯ブラシで歯を)磨く)⑯クチュクチュスルヨ(くすぐる)⑰カリカリシタノオボエテル((耳かきで耳の穴をきれいに)ほじる)⑱ペッシナサイ⑲ペッペシナサイ(吐き出す)⑳ポーンポーンスルノ㉑ポーンシテゴラン(ボールをなげる)㉒ポトンシテゴラン((容器にモノを)いれる)㉓トントンシナクチャ(大工仕事をする)㉔パカパカシテゴラン(馬にのる)㉕ヨイチョヨイチョシヨウ((ものを)運ぶ)㉖ヒューシナイノ((足を)急にあげる)㉗ペタペタシテゴラン((ものを)張る)㉘ジャーシテ((水を)あける)㉙コンコンシタラカワイソ(叩く)㉚トントンシチャダメ(叩く)㉛ヒラヒラシナイネ((鯉ノボリが)ゆれる)㉜ポイシテテヨダイ(捨てる)㉝モグモグシテテヨダイ(よく噛む)㉞エーンエーンシテルヨ(泣く)㉟プチュシナクチャ((スイッチを)押す)㊱パチンシタノ((スナップを)とめる)㊲ゴロゴロシテクダサイ((積木を)崩す)㊳トントンパカシテゴラン((卵を)割る)	

㊱一母の場合、17の下位区分の中で一番語数の多い類は「身体各部位・生理現象」名で、これだけで㊱一母の幼児語総数を上回る。これに対し㊱一母の場合は「動物」名が最多数で、「身体部位」は「人名」に次いで3位となっている。

本研究の被験者の幼児語彙の大きさ、その意味領域の構成比が、日米社会の平均を示すものかどうかは参考資料の不足で判断しにくい。㊱一母の幼児語に関し、対比の根拠になり得

るのは Ferguson (1964) の示している米語の一般的な幼児語のリストで、形態論的特徴をもつ語として24を記録している。形容詞も含むこれら24語は(1)kin (2)body (身体部位名, 生理現象他, 飲食物も含む) (3) qualities (4) animals and games の4つの意味領域に分類され, animals and games 38%, body 29%, qualities 21%, kin 12%の割合となっている。⊕一母の幼児語は Ferguson のリストと部分的にしか重なっていないが, 名詞と形容詞の22語を Ferguson の分類法にならって再分類すると, animals and games 41%, qualities 23%, body 18%, kin 18%と, 「身体語」数の低さを除けば, かなり似通った分布を示し, ⊕一母の幼児語の使用が米社会で特に例外的でないことを示唆している。

日本語の幼児語彙に関しては, Chew (1969) の実証的研究があり, 被験家族(複数)に共通して使われた幼児語として121語が記録されている。⊕一母の185は, その1.5倍に当たるが, 語の数が Chew の場合と異なり, 成人語に尊敬辞が添付されたものすべてと, 幼児語に接辞詞が添加されたもの(e. g. ワンワン, ワンワンチャン)を別語扱いにしているから, 実質的には Chew の数字をそれほど上回るものではなかろう。とすると, ⊕一母に見られる使用タイプ語数の著しい差は, 日米二人の母親のきわめて個人的な片寄りというより, 日米間の一般差を反映したものと言えよう。

1. 2. 形式分類

使用幼児語は, その語形式によって, ⊕一母の場合は4つ, ⊕一母の場合は3つの型に大きく分類することができる(表-5, 6)。そのうち, 誇張性と遊戯性を備えた「重複表現」と「音声的表現」は日米に共通する型であり, ⊕一母の多用する「親愛表現」も, 「卑小な子ども性」を強調する点において, ⊕一母の「愛称的」表現に相通じるものがある。そこで日米両者間の大きな違いとして浮かび上がってくるのが⊕一母の「丁寧表現」型である。

「丁寧表現」型は⊕一母がもっとも多用した型で, 全体の約52%を占め, この比率は⊕一母の場合の「親愛表現」型とほぼ一致する。日米でそれぞれ最高位をしめる幼児語形式が, 言語的に対照的な待遇方法を示している点で興味深い。

言うまでもなく一般に丁寧表現は相手との心理的・社会的距離をへり下って大きくとる場合に使われ, 反対に親愛表現はその距離を小さくとる場合に使われる。この原則からすれば, 丁寧表現はBTとほとんど無縁のはずである。それが日本では幼児語の一大特徴といわれるほどに多用されている。子どもとの同調化志向が強い日本の母親が, 対話の対等な相手として子どもを扱うにはあまりにもいたいけないと感じるとき, 上手に出るよりはむしろ下手に出て調節をはかる傾向があることを示唆する言語現象といえよう。

一方, 英語の幼児語を形態論的にマークする接辞 *-ie*, *-y* は, diminutive (指小辞) とも hypocoristic (愛称辞) とも呼ばれ, 卑小さに対する親愛感を示す言語手段とされる。後者は

表一五 ㊸一母の使用幼児語の形式分類

型	語数	%	例
1. 「丁寧」表現型	96(8) ⁽²⁾	51.8%	
1.1. 「オ」接頭辞添加			
「オ」+成人語	(38)	(20.5%)	オカタズケ
「オ」+幼児語	(2)		オテテ
1.2. 「サン」の添加			
成人語+「サン」	(40)	(21.6%)	ラッパサン
幼児語+「サン」	(4)		ピヨピヨサン
1.3. 「オ」接頭辞, 「サン」接尾辞添加			
「オ」+成人語+「サン」	(18)	(9.7%)	オリコーサン
「オ」+幼児語+「サン」	(2)		オメメサン
2. 「重複」表現型 ⁽³⁾	28	15.1%	
2.1. 成人語重複	(17)	(9.2%)	ナイナイ
2.2. 幼児語重複	(3)	(1.6%)	バッチバッチ
2.3. 成人語語頭音重複	(5)	(2.7%)	クック
2.4. 成人語一音節重複	(3)	(1.6%)	ニューニュ
3. 「音声的」表現型	43	23.2%	
3.1. 擬声語・擬態語	(13)	(7.0%)	ブーブ(車)
3.2. 成人語(名)+擬声語・擬態語	(2)	(1.1%)	キシャポッポ
3.3. 擬声語・擬態語複合+成人語(動詞スル)	(28)	(15.1%)	ポイスル
4. 「愛称的」表現型	5	2.7%	
4.1. 「コ」または「ボ」の語尾添加	(5)	(2.7%)	ウソッコ
5. その他	13	7.0%	オンモなど
計	185	99.8%	

表一六 ㊹一母の使用幼児語の形式分類

型	語数	%	例
1. 「重複」表現型	5	22.7%	
1.1. 幼児語重複	(3)	(13.6%)	pee pee
1.2. 成人語部分重複	(2)	(9.1%)	yuk yukky
2. 「音声的」表現型	2	9.1%	
2.1. 擬声語	(2)	(9.1%)	ding ding
3. 「親愛」表現型	12	54.5%	
3.1. 成人語+指小辞 -y または -ie	(10)	(45.4%)	doggy
3.2. 成人語の一部修正 +y または -ie	(2)	(9.1%)	tummy
4. その他	3	13.6%	
計	22	99.9%	

語源的にギリシャ語, hupo- (=below, beneath)+korizesthai (to caress) からきており, その原義は, 「目下のものを愛撫する」という意味に近い。大人の子どもに対する保護者的優位から出発した親愛表現として, 日本語の丁寧表現と著しい対照をなすということができよう。子どもに対するいとしさの感情が, このように正反対の言語手段で表わされるということは, 伝統的な母子関係のあり方に文化差があることを示唆していて興味深い。

なお丁寧表現多用の要因として, 日本語の幼児語に顕著な擬人化の傾向も指摘しておかなければならない。尊敬辞「さん」は, 人の氏名や職業名などにつける敬意表示詞だが, 幼児語では身近な動物から無生物までしばしば人間扱いされ, 「さん」付けの対象となる。㊸一母の使用幼児語では, 「サン」付き名詞は丁寧表現の約60%, 全体の31%に当たるが, 人間に添加されたのは全体の僅か3.7%にとどまっている。擬人化を子どものメンタリティーへの同調化のころみとしてとらえることができるなら, その根は尊敬辞「オ」の添加と同じ土壌にあるといえよう。

以上, 語形式に関する日米間の特徴的な違いを見てきたわけだが, それ以上に大きい差異は, 幼児語を造語する言語手段の生産性の違いである。日本語には, 成人語を自由に幼児語化できる「オ」や「サン」がある上, 言語による抽象化を避けた擬声語, 擬態語の使用が大幅に許されて, 幼児むきの名詞ばかりか多数の動詞の製造が可能となっている。これに対応する生産性は英語の幼児語形式には認められず, 「指小辞」-ie と -y, および「音節重複」が成人語から幼児語をつくる手段として限られた造語力をもつに過ぎない。各言語が母子のコミュニケーションにどのような特別の言語手段をどの程度用意するかは, その言語社会の母子関係のあり方, 子ども観と大きくかかわってくる。これは個人的な選択以前の問題で, その点英語は日本語にくらべ少なくとも幼児語の生産手段において制約的な言語といえそうである。

1. 3. 幼児語使用度

日米の母親の幼児語の使用度の調査においては, その指数として使用名詞の延べ数に対する幼児語名詞の延べ数の割合を求めることとした。㊸一母の1回45分間の収録対話中, 「接触機能」的発話を除いた残りの発話に現われる名詞の延べ数は平均248語, そのうち幼児語名詞は延べで平均209語を数え, その比率は84%と, 成人語使用率16%の約5倍以上の高率を示している。

㊸一母の場合, 1回45分の収録資料は, 対象児への母の発話以外に, 母と対象児の姉との対話, テレビやレコード音などもかなり含まれており, 単純に45分間内の使用名詞延べ数, 幼児語延べ数を㊸一母との対比で出すわけにはいかない。そこで7回の収録場面のなかからもっとも干渉要素の少ない2場面を選び, 使用度分析の資料とした。そこでの幼児語名詞使

用率は12.5%（場面A11%，場面B14%）で，㊸一母の成人語使用率に近く，両者間で成人語対幼児語の使用比率はほぼ逆となっている。

幼児語の使用度は同じ文化内でも個人差が大きい。ここに見る日米間の使用度の著しい違いがどれだけ一般性をもつものか今後の実証的研究をまたねばならない。しかし，これまで見た通り，日本語には乳幼児位相語として固定した語彙が英語より多くあること，成人語から幼児語をつくる言語手段が発達していて，造語が比較的自由にできること，その活用を抑える社会的圧力が必ずしも強くないことなどが，日本における幼児語使用率を相対的に高めているということは言えるだろう。

この最後の点に関し，Fischer（1970）は，平等主義を人間関係の原則とするアメリカと違って，階層的タテ社会を建前とする日本では，子どもを成人とは異なるものとして特別扱いすることに心理的な抵抗が少ないからだとのべている。

幼児語は日本語であれ，英語であれ，幼児を特別扱いするところから生じている。しかし幼児語の形態論的分析でみた通り，その「特別扱い」は，英語の方が大人と子どもの上下関係を強調したもので，日本語の方がむしろ「平等的」とさえいえる。“Itsy-bitsy cuite pie”で代表される英語の幼児語の典型的接辞は，大人の優位さからみた子どもの小ささへの親愛表示であり，一方日本語のそれは，子どもと同一の位置にたつか，優位の座を譲ったことを象徴するものが多い。

日本的コミュニケーションが相手との同調一体化を志向する傾向が強いなかで，母子のコミュニケーションが例外であるはずがなく，幼児語の使用もその一環として位置づけることができる。幼児語に対する社会的態度が比較的受容的な理由の一つもこのへんにある。

しかし，成人が子どもの水準に自分を合わせるという言語的虚構は，子どもに正当な地位の自覚，自己認識を遅らせるおそれがあるのも事実である。わが国でも幼児語使用に批判的なものはこの点を強調する。たしかに，子どもの発達段階にもはや不適合な幼児語の継続使用は問題であろう。今回の㊸一母の幼児語使用度が17ヶ月の子どもに適合的か，これを測る尺度をもたないが，発話資料で見ると，幼児語の使用が現前の子どもの関心をひくより多くのものを言語化して語りかけることを㊸一母に許し，発話量の大きさの一つの要因になっているようにも思われる。

2. 接触機能表現

㊸一母の総発話数3,012のうち，母子相互の反応性をたかめる言語操作に用いられた「接触機能」的発話は1,151で，全体の38.2%にあたる。㊸一母の場合，その数は420だが，総発話数が1,008と少ないため，比率においては，41.6%と㊸一母の場合より3.4%高くなっている。

表一七 ㊸㊹接触機能表現分類表

能動的機能	㊸		㊹		受動的機能	㊸		㊹	
	発話数	%	発話数	%		発話数	%	発話数	%
1. 能動的					2. 受動的				
1.1. 呼びかけ	191	16.6	184	43.8	2.1. 応答	289	25.1	89	21.2
1.2. かけ声	120	10.4	21	5.0	2.2. きき返し	106	9.2	22	5.2
1.3. 念おし	108	9.4	—	—	2.3. 模倣	31	2.7	29	6.9
1.4. 感情表現	125	10.9	26	6.2	2.4. 謝意表現	12	1.0	10	2.4
1.5. 遊戯的音声表現	169	14.6	39	9.3	小 計	438	38.1	150	35.7
小 計	713	61.9	270	64.3	総 計	1,151	99.9	420	100

この種の発話は母親が子どもに対して働きかける能動的な発話と、子どもの音声的または行動的、あるいはその両者の同時的な働きかけに応える受動的なものに大別できる。

「能動的」な発話を、「呼びかけ」「かけ声」「念おし」「感情表現」「遊戯的音声表現」の5つに、「受動的」な発話を、「応答」「きき返し」「模倣」「謝意表現」の4つに、それぞれ下位分類し、各々の範疇に属する発話数とその比率を表一七に示した。

「能動的」な発話が「受動的」な発話より多いことは日米の母親に共通で、その比率もほぼ同一となっている。「能動的」発話では「呼びかけ」が日米共に最高位を占めているが、その比率にはかなりの開きがある。㊹一母では全体の43.8%、「能動的」発話のみで68.0%を示しているのに対し、㊸一母の場合は、それぞれ16.8%、26.8%となっている。

この範疇に分類された発話の中で、㊹一母のみにその使用が見られるのは、“hello” “hi”のあいさつ表現である。英米では同じ家族でも家の中でしばらく別々の時を過ごしていたもの同士、顔を合わせるときには“hi” “hello”を交換する。母の膝もとから離れて一人遊ぶ子どもと、視線があったときに発する“hello”や“hi”もこれと同一線上にあるあいさつ行動で、㊹一母の「呼びかけ」は、この種のことばかけによって発話数をふやしている。と同時に㊹一母子の遊び場面では、接触の途切れを前提とするこの種のことばかけが度々必要とされるほど母子の接触度がゆるやかで、㊸一母子ほど密着的でないことが示唆される。もっとも、㊹一母子の場合、言動共に活発な姉妹が場面に介在し、対象児との接触を分断する働きをしたことも、この種の「呼びかけ」をより多く必要とした理由になっている。

日米の母親の「呼びかけ」に現われたもう一つの違いは呼称に関してである。㊸一母にくらべ㊹一母の名前による呼びかけは頻度も高く、バラエティにもとんでいる。すなわち、㊸一母の場合、呼称は一貫して「名+チャン」(e. g. シンチャン)であるのに対し、㊹一母では、「名」(e. g. Rebecca)、「ニックネームとそのバリエーション」(e. g. Becca, Becky, Becca-Beck, Becca-Becky, Becca girl, little Becca), および各種の親愛表現 (e. g. sweetheart, sweetie, baby girl) が用いられている。日本語のように形態論的に規定された待遇

表現形式をもたない英語のなかで、呼称は相手への態度を示す重要な言語要素とされる。⊕一母の呼称使用度、その種類が多いのも、母子の関係調節に呼称が日本の場合より大きな意味を課せられているためと思われる。

残りの「能動的」発話では、いずれも⊕一母の方が⊗一母よりも高い発話率を示している。⊕一母にのみ記録されている「念おし」は、感動詞「ね」の頻繁な使用(e. g. (球の入れ方を教えて)「そっちダメ。こっちよ。ネー」)を含むものである。この項目で⊗一母がゼロを記録しているのは、⊗一母が「念おし」行動に欠けるのではなく、叙述的発話にかかるプロソディック要素がこの機能をはたし、個別的な発話として表われなかったためと思われる。

「かけ声」「遊戯的音声表現」で日米間に見られる違いは、単に量的なものに過ぎないが、「感情表現」においては、質的違いが見られる。すなわち⊗一母の場合はそのほとんどが母親自身の感情表現(e. g. (むずかる子どもに)“Oh, you sleepy thing.”)であるのに対し、⊕一母はしばしば子どもの代弁者として喜怒哀楽を誇張的に表わしている(e. g. (おやつをたべる子どもに)「アー、オイテイ」、(おちた積木を指さす子に)「アーア、積木さんおっこっちゃった」)。

「受動的」な発話は、日米の母親が子どもの働きかけに共に協調的に応えていることを示している。⊕一母の場合、⊗一母より「きき返し」が多く、「音声模倣」が少ないのは、母親の特徴というより、子どもの月齢差によるものと思われる。すなわち、⊗一子より5ヶ月上の⊕一子は、言語的音声活動が始まり、限られたものに関し命名的発話が可能であるため、それだけ子どもの発話意図を「ウン?アー?ウンナノ?ドースンノ?」などと問い返すことが多くなり、単なる子どもの音声模倣が相対的に少なくなったものと考えられる。

以上の通り、「接触機能」的発話行動には、幾つかの点で相異は認められるものの、子どもの反応をひき出す働きかけ、ひき出した反応に対する受けとめ方など、基本的なコミュニケーション・ストラテジーにおいて、日米母親間に高い共通性があることがわかる。

子どもに対する母親の発話行動の比較研究では、これまで日本の母親が欧米の母親より発話量が少なく、子どもとの接触が言語的よりむしろ非言語的だといわれてきた(Caudill, 1970)。しかし、近年日米の学者が協力して行った日米の母親の子どもに対する行動の比較調査(東, 柏木, ヘス, 1981)では、日本の母子の言語的接触量がアメリカのそれに匹敵するものであるという結果がでていいる。ここでとらえた「接触機能表現」においても、子どもとのかかわりにおいて、⊕一母は⊗一母と同等またはそれ以上に反応性の高いやりとりを持続するのに有効な言語操作をおこなっており(資料A参照)、子どもとの言語的接触に積極的な姿勢をもつことを示している。これだけ積極的な姿勢があれば、それなりの発話量があるのは当然で、環境的にノイズが多かった⊗一母よりも、はるかに多い発話量を記録している。

資料A 日米母親の子どもに対する発話例

(5/15の記録から)		(8/4の記録から)	
母	おんも行けないよ。雨コンコン降ってるもん。 <u>ねエー</u> 。風ビュービュー吹いてんでしょ。	母	Read your book some more? Bring it over here, <u>Becky</u> .
子	アー	子	da di di.....
母	<u>うん</u> , おんも行くと, 風邪ひくもん。 <u>ねエ</u> 。	母	Daddy'll be home soon.
子	アーアー	子	adi di di
母	<u>ダメ</u> , おんも行っちゃ, 寒いから。おんも行っちゃ寒いから, やめなさい。	母	<u>Oh</u> -we'll play in here. (姉娘入って, テレビをつける。母子相互作用一時停止)
子	アーアー	母	<u>Hi, Becca</u> . Are you watching, too? <u>Look</u> . Bring the booky. Go get it. Go get it. Go get it and bring it back here and we'll read it.
母	おんも行ったらお風邪ひくよ。 <u>ねエ</u> 。 (子供あきらめて, 本を出しにかかる)	子	ah ah.....
母	こっちの方がいいの? これ, ママ見るの? <u>ハイ</u> 。	母	<u>That. Yeah</u> . Wanna read that? (本をわたす)
子	ウン。	子	<u>Thank you</u> . <u>Come on</u> .
母	<u>信ちゃん</u> 。それ見るんでしょ? ママこれ。	母	a di di da.
子	ウン。アーア	母	Sit on my lap? (姉娘加わる)
母	<u>あ</u> , 可愛いね。ニャーニャいた。 <u>ニャーニャ</u> 。 <u>ニャーニャー</u> 。(なきまね)	子	gach.
子	ニャー。	母	Lap? Lap?
母	<u>うん</u> 。ニャニャおんもにいるの?	子	hummm.....
子	ウン	母	Hands. This book was for (不明)
母	<u>信ちゃん</u> , ニャーニャって言ってごらん。	子	aaha.
子	ニャーニャ。	母	<u>Uh-hun</u> . Oh, Becca, you need clean pants.
母	<u>そう</u> , 上手に言えるようになったね。	子	aaha.
子	アア	母	Do you need clean pants, <u>Rebecca girl</u> ?
母	<u>ほら</u> , ニャーニャここにいるでしょ。	子	aaha.
子	ア, アー	母	<u>Uh-hun</u> . I think you do. Let's read the book. We'll get you clean pants. (本を見はじめる)Hands are so handy. They lift and pull and push. They write, too.
母	<u>うん</u> , それママね, ママのご本ね。	子	dada. (子どもページをめくろうとする)
子	エーイ。	母	<u>Oh</u> , you wanna turn the page?
母	<u>ねエー</u> 。ママのご本きれいね。 <u>ホラ</u> , きれいでしょ。	子	AAAh... (in a loud voice)
子	ウー。	母	Gently, <u>Becca</u> . Anna can look, too.
母	<u>そう</u> , きれいねお花さん, きれいね。	子	WAAA.....
		母	(ひとりごと) (Oh, She doesn't want to share.)
		子	AAAh...

	母	Becca, don't push Anna away. There's room for Anna. (ここで beeper が鳴り出す)
	母	Oops. There's the beeper.
	子	AAAh.....
	母	Becca! (Anna: Don't push me away.)
	子	Yaiya.
	母	OK. You look at that. I'll get the beeper.....We'll get you clean pants.

IV. おわりに

以上、日米母親各一組の発話行動を、その expressive 要素を中心に、使用された幼児語、「接触機能表現」を通して分析を行った。仮定された通り、㊸一母の幼児語の使用度は圧倒的に高く、使用名詞100語につき84語が形態論的に幼児語の特性を備え、100語につき約13語を幼児語とする㊸一母と著しい対照を示す結果となった。

「接触機能表現」に関しては、子どもへの能動、受動、いずれの対応においても、その表現型は日米共通のものが多く、会話操作の基本において両者間に大きな差がないことが認められた。一語文もまだ十分に発することの出来ない子どもに対して、日米いずれの母親も、「話し手」と「聞き手」の立場が交替でとれるよう言語調整を行ない、対話行動の相互性の原則をはじめから実践している姿を示している。

母子間の特別な情動を基盤とした expressive な発話行動は語彙の選択という点で日米間に相異を見たが、成人語をより多く選択した㊸一母も、その連鎖の発音においては、2才11ヶ月の姉娘に話すときとは明らかに異なるBT特有のプロソディック・パターンを示していたことを指摘しておく。

相互作用の場に子どもをひきいれ、共感度の高いコミュニケーションの場を整えるという共通の営みのなかで、日米の母親は類似のストラテジーをとりながらも、語彙選択行動において子どもへの情動は文化の型どりを受けて表現されていた。この二人の高学歴の中流階級の母親に見られた類似点と相異点が日米の同じような母親の一般的特性といえるものか、サンプル数をふやした比較研究が今後の課題として残されることとなった。

註

- (1) Baby Talk (BT) が狭義に用いられるときはいわゆる幼児語彙と特別の抑揚をさすが、ここではそのような限定指示がないかぎり、育児期の母親が子どもに向かって用いる特徴的な話しことばの全体系をさすものとする。日本でも近年これに「育児語」の用語を与え、狭義の「赤ちゃんことば」と区別している。英語圏でもまぎらわしさを避けるために広義のBTを motherese または caretaker speech と呼ぶ研究者もいる。

- (2) ()内の数字は、二重の幼児語形式を備え、第一次的には別型の幼児語形式に属しているため、別件扱いとした語数。
- (3) 「重複」表現には、擬声語、擬音語の音節重複を含めず、「音声的」表現の一部として扱うこととする。

参考文献

- 東洋・柏木恵子・R. D. ヘス (1981) 『母親の態度・行動と子どもの知的発達——日米比較研究』東京：東京大学出版会。
- Broen, P. A. (1972). The verbal environment of the language-learning child. *Monograph of American Speech and Hearing Association* no. 17, December.
- Brown, R. & Bellugi, U. (1964). Three processes in the child's acquisition of syntax. *Harvard Educational Review* 34, 133-51.
- Brown, R. (1977) Introduction. In C. E. Snow & C. A. Ferguson (eds), *Talking to Children*. London: Cambridge University Press.
- Caudill, W. & Weistein, H. (1970). Maternal care and infant behavior in Japanese and American urban middle-class families. In R. Hill & R. Konig (eds), *Families in East and West: Socialization Process and Kinship Ties*. The Hague: Mouton.
- Chew, J. J. Jr. (1969). The structure of Japanese baby talk. *Journal Newsletter of the Association of Japanese* no. 6, 4-17.
- Chomsky, N. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Drach, K. (1969). The language of the parent: a pilot study. *Working Paper 14*, Language-Behavior Research Laboratory, University of California, Berkeley.
- Ferguson, C. A. (1964). Baby talk in six languages. *American Anthropologist* 66, 103-14.
- Ferguson, C. A. (1971). Absence of copula and the notion of simplicity. In D. Hymes (ed), *Pidginization and Creolization of Language*. London: Cambridge University Press.
- Ferguson, C. A. (1977). Baby talk as a simplified register. In C. E. Snow & C. A. Ferguson (eds), *Talking to Children*. London: Cambridge University Press.
- Fischer, J. L. (1970). Linguistic socialization: Japan and the United States. In R. Hill & R. Konig (eds), *Families in East and West: Socialization Process and Kinship Ties*. The Hague: Mouton.
- Fodor, J. A. (1966). How to learn to talk: some simple ways. In F. Smith & C. A. Miller (eds), *The Genesis of Language*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Garnica, O. (1977). Some characteristics of prosodic input to young children. In C. E. Snow & C. A. Ferguson (eds), *Talking to Children*. London: Cambridge University Press.
- Hymes, D. H. (1972). Models of interaction of language and social life. In J. J. Gumperz & D. H. Hymes (eds), *Directions in Sociolinguistics*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Jakobson, R. (1960). Linguistics and poetics. In T. A. Sebeok (ed), *Style in Language*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Kobashigawa, B. (1969). Repetitions in a mother's speech to her child. *Working Paper 14*, Language Behavior Research Laboratory, University of California, Berkeley.
- McNeill, D. (1966). The creation of language by children. In J. Lyons and R. J. Wales (eds), *Psycholinguistic Papers*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

- Moerk, E. (1972). Principles of interaction in language learning. *Merrill-Palmer Quarterly* 18, 229-57.
- Phillips, J. (1973). Syntax and vocabulary of mothers' speech to young children : age and sex comparisons. *Child Development* 44, 182-5.
- Snow, C. E. (1972). Mothers' speech to children learning language. *Child Development* 43, 549-65.
- Snow, C. E. (1976). The language of the mother-child relationship. In S. Rogers (ed), *They Don't Speak Our Language*. London : Edward Arnold.
- Snow, C. E. (1977a). The development of conversation between mothers and babies. *Journal of Child Language* 4, 1-22.
- Snow, C. E. (1977b). Mothers' speech research : from input to interaction. In C. E. Snow and C. A. Ferguson(eds), *Talking to Children*, London : Cambridge University Press.
- Vorster, J. (1975). Mommy linguist : the case for motherese. *Lingua* 37, 281-312.
- Widdowson, J. (1976). The language of the child culture : pattern and tradition in language acquisition and socialization. In S. Rogers (ed), *They Don't Speak Our Language*. London : Edward Arnold.

〔短期大学部教授（英語学） 1979-82年度総合研究 1
（子どもの社会化過程に関する比較文化的研究） 研究員〕